歌劇　幕臣・渋沢平九郎

渋沢平九郎プロジェクト実行委員会

武蔵国榛沢郡(むさしのくに はんざわぐん)(埼玉県深谷市)の農民から幕臣となり、飯能戦争に散った若武者・渋沢平九郎を中心に、彰義隊の頭取で後に実業家となり大成功をおさめた渋沢成一郎、富岡製糸場の初代場長・尾高惇忠(じゅんちゅう) 、日本資本主義の父・渋沢栄一など、維新回天の推進力となった平九郎の兄弟と従兄弟たちが駆け抜けた幕末動乱期を描き出した青春群像歌劇(オペラ)。

【概要】

平九郎は下手計(しもてばか)村の名主の三男として生まれた。長男の尾高惇忠は、近郷の子弟を集めて学問を教える秀才、次男の尾高長七郎は、家業を継いだ兄の惇忠に代わって江戸に遊学。隣村には渋沢栄一と渋沢成一郎の従兄弟たちも住んでいた。それぞれが家業に精出し平穏な日々を過ごそうとしていたが、そこに黒船が来航する。時代は彼らをただの農民で終わらせようとはしなかった…。

黒船来航以来、江戸幕府の対応に不信感が募り、体制議論(幕府 or 新政府)が巻き起こり、日本各地で内戦が勃発。平九郎たちは同じ志を持ち合って、この大きな波の中に自らの人生を拓こうとしていた。

【主な登場人物】

＜渋沢平九郎＞

1847 年生まれ。三男。長男惇忠とは 17 歳、次男長七郎とは 11 歳離れている。従兄弟の成一郎の 9 歳下、栄一の 7 歳下である。1866 年に栄一の養子となり幕臣となる。背の高さ 5 尺 7 寸の大柄な武士。飯能戦争で敗れ自刃(1868 年 5 月 23 日)。

＜尾高惇忠＞

1830 年生まれ。平九郎と長七郎の兄、栄一・成一郎の従兄弟。幼いころから頭が良く、17 歳の時には自宅で「尾高塾」を開き学問を教える。栄一も教えを受けていた。高崎城乗っ取り計画を栄一とともに立てるが、弟・長七郎の説得などにより断念。彰義隊・振武軍にも参加し、旧幕府軍として新政府軍と抗戦。最終局面の箱館戦争まで戦い続けた。

＜尾高長七郎＞

1836 年生まれ。惇忠の弟、平九郎の兄、栄一・成一郎の従兄弟。高崎城乗っ取り計画を企て、挙兵直前であった渋沢栄一や兄・惇忠を説き、その不可なることを訴え、これを断念させようとした。1868 年 11 月 18 日病没。

＜渋沢成一郎＞

1838 年生まれ。惇忠・長七郎・平九郎・栄一の従兄弟。高崎城乗っ取り計画頓挫により江戸に逃れ、一橋慶喜に仕える。1867 年に慶喜が将軍になると幕臣となる。戊辰戦争の最初の戦闘「鳥羽・伏見の戦い」に参戦。江戸帰還後、彰義隊を結成し頭取に就任。彰義隊脱退後は惇忠・平九郎らと振武軍を結成し頭となる。惇忠と同じく最終局面の箱館戦争まで戦い続けた。

＜渋沢栄一＞

1840 年生まれ。惇忠・長七郎・平九郎・成一郎の従兄弟。5 歳の頃より父から読書を授かり、7 歳からは従兄弟・惇忠の許に通い学問を学ぶ。剣術修行で知り合った勤皇志士との交流により尊王攘夷思想に目覚め、高崎城乗っ取り計画をたてる。計画断念後は京都に逃れ一橋慶喜に仕える。慶喜が将軍になると幕臣となり、1867 年のパリ万博に随員としてフランス渡航。その際に平九郎を養子にした。大政奉還に伴い、新政府から帰国を命じられ 1868 年 11 月 3 日に帰国。

＜天野八郎＞
幕末期の幕臣、彰義隊副頭取。大政奉還により慶喜が水戸へ退去したため、彰義隊も行く末を決めなければならなかった。徹底抗戦を主張した天野と、慶喜退去に合わせて日光へ退く提案をした頭取・渋沢成一郎の間で路線対立が起こり彰義隊と振武軍に分かれた。上野戦争で敗走し市中に隠れ再起を図ったが、密告で捕えられ獄中生活 5 か月後に病死。
＜ゆう＞
平九郎の幼馴染。年貢の取り立てが厳しい中、貧しさゆえに江戸に売られてしまう。平九郎が江戸に来ていると聞きつけ彰義隊を訪ねる。
＜助左＞
尾高家に親子代々仕える使用人。平九郎が生まれた時から見守り続け、支え続ける。いつも平九郎と行動を共にし、平九郎に尽くす。

【あらすじ】
時と場所：幕末（1863 年～1868 年）。深谷→京都→江戸→飯能→黒山。

■第 1 幕■
＜1 場＞1863 年 11 月初旬。深谷。
　平九郎の実家二階の間では、兄の惇忠と長七郎、従兄弟の渋沢栄一や渋沢成一郎をはじめとする近郷の尊王攘夷派の同志たちが夜な夜な集まり、物騒極まりない計画を立てていた。それは、高崎城を乗っ取って武器を奪い、横浜を焼き払って外国人を皆殺しにするというものであった。
　家業に専念する惇忠に代わって江戸に遊学していた長七郎は、水戸藩の志士たちと交流があったことから、「坂下門外の変」の一味として追われる身となり 2 年近く京都に隠れていた。先月やっと実家に戻ってきたが、この経験から世の中を変える難しさを痛感していた。
　一方、機が熟したと感じた栄一らは、惇忠が書いた触書「神託」で、近隣の志士たちに檄を飛ばし、決起を促そうとした。このとき惇忠が**「神託」**を歌う。「神託」を聞いた同志たちは、何かに取り憑かれたように**「決起の歌」**を歌い上げるが、その姿は死ぬことを夢見ているかのように長七郎には見えた。

＜2 場＞1863 年 11 月中旬。深谷。
　いよいよ高崎城乗っ取りの決行日を決める時が来た。息巻く皆に対して、長七郎は意を決して口を開いた。合唱**「八月十八日の政変」**を歌う。今は尊王攘夷派を京都から排除する「八月十八日の政変」が起きたばかりで時期が悪いこと、同志の数が足りないことなどを挙げて、この計画は無謀で百姓一揆と変わらなく犬死することを主張。計画を断念するように必死に説得し、二日二晩の議論となった。
　そうこうしているうちに、お役人の知るところとなり、やむをえず断念することに。親族に類が及ばぬよう、栄一は京都、成一郎は江戸に逃れた。惇忠と平九郎は郷里に留まり家業に努め、長七郎は再び江戸遊学の準備をはじめた。ここからそれぞれの運命が動き始める･･･。

＜3 場＞1864 年正月。京都。

栄一が逃れた京都は、幕府・薩摩・長州・新選組などの謀(はかりごと)に渦巻く物騒な町になっていた。合唱**「京の町は物騒だ」**を歌う。京都に逃れた栄一は、知り合いのつてで勝海舟と会った。栄一に聡明さと可能性を感じた勝海舟は、一橋慶喜に会うことをすすめる。

世の中はここから、新選組による多くの弾圧事件や、ええじゃないか騒動などで混迷を極め、江戸幕府は末期症状を呈することとなる。合唱**「ええじゃないか」「新選組による弾圧」**を歌う。

＜4 場＞1868 年 2 月 23 日。江戸浅草本願寺。

栄一が京都で勝海舟に会っていた頃、長七郎は実家から江戸に向かう途中、誤って通行人を殺傷した罪で、4 年の長きにわたり江戸伝馬町の獄に繋がれてしまう。京都に逃れた栄一と、江戸に逃れた成一郎の二人は共に一橋慶喜に仕え、3 年後に慶喜が将軍になるに伴い幕臣となる。翌年の初頭、栄一はパリで行われる万国博覧会に将軍名代の随員として渡航。渡仏に際し自分の身に何かが起きた時に相続人がいないと家がつぶれるため、平九郎を養子とした。平九郎は養子により晴れて武士の道に進み幕臣となり、江戸に出て文武修行に励むことになった。

こうして高崎城乗っ取り計画断念から 4 年の歳月が流れていった･･･。

ひと月前、京都で鳥羽・伏見の戦いがあり戊辰戦争の火蓋が切られた。成一郎が参戦。戦いは新政府軍の勝利となった。慶喜は大阪城を脱出し大阪湾から船で江戸城へ逃れた。将軍慶喜の逃亡により幕府軍は戦意を喪失し総崩れとなった。この敗戦により、朝廷から慶喜追討令が出され幕府は朝敵となる。

慶喜は新政府への恭順の意を表し、江戸城を去り上野寛永寺に蟄居したが、これに不満を持つ武士たちは、幕府と慶喜のために「大義を彰(あきら)かにする」という意味で「彰義隊」を結成した。頭取には渋沢成一郎、副頭取には天野八郎が選出され、千名を超える集団となった。

江戸の町は薩長率いる新政府軍(官軍)が跋扈していた。遠くから官軍が歌う「宮さん宮さん」が聞こえてくる。彰義隊の結束と「薩賊」討滅を誓い、男声合唱**「雪冤の歌」**、成一郎・天野・平九郎・惇忠で**「彰義隊の歌」**を歌う。

■第 2 幕■

＜1 場＞1868 年 4 月中旬。上野寛永寺。

官軍・西郷隆盛と幕府軍・勝海舟の会談により、武力衝突なしで江戸城を官軍に明け渡すことになった。100 万人が住む江戸は戦禍を免れたのである。男声合唱**「江戸城無血開城」**を歌う。開城と時を同じくして慶喜は水戸へと退去した。勝海舟は武力衝突を懸念し彰義隊解散を促したが、官軍と一戦交えようと各地から兵が続々と集まり、彰義隊は 4000 名に達する規模に膨れ上がった。

頭取の成一郎は慶喜が江戸を退去したため、彰義隊も日光に退くことを提案したが、副頭取の天野八郎は江戸に駐屯し徹底抗戦を主張したため路線対立が起こった。成一郎・惇忠・平九郎らは彰義隊を脱退し、同志 300 名とともに「振武軍」を結成し、上野を離れ田無に移っていった。成一郎・天野・惇忠・平九郎らは**「彰義隊脱退の歌」**を歌う。

ゆうは平九郎が彰義隊にいると伝え聞き、急いで上野寛永寺を訪ねるが時すでに遅く、平九郎が彰義隊を脱退した後であった。

＜2場＞1868年5月18日～23日。飯能。

彰義隊と官軍の戦い「上野戦争」が起こり、一日にして彰義隊はほぼ全滅した。成一郎率いる振武軍も援護に赴いた。二つに分かれた彰義隊と振武軍であったが、幕府と慶喜のために立ち上がった者同士、彼らの一大事に成一郎はいてもたってもいられなかったのである。しかし、行軍中に敗戦の報が入り、やむなく敗残兵を連れて引き返した。300 名だった振武軍は上野戦争の彰義隊敗残兵を加えて一気に1500名に膨れ上がった。上野戦争が終わると官軍はそのまま振武軍の追討に向かった。

成一郎たちは官軍の来襲に備えて本営を飯能の能仁寺に移して迎え撃つ準備を進めた。合唱と惇忠・成一郎が**「百姓口論」**を歌う。

5月23日早朝に官軍と激突。男声合唱**「振武軍 VS 新政府軍」**を2群で歌う。圧倒的な兵力と火器を有する官軍に対抗する術もなく、僅か数時間で振武軍は敗走。平九郎**「敗軍のアリア」**を歌う。

惇忠と負傷した成一郎は、平九郎に後を託して先に落ち延びた。平九郎は二人と再び合流する約束をして、振武軍の殿（しんがり）をつとめながら撤退した。

ゆうは、彰義隊を訪れて平九郎が脱退して振武軍となったことを聞き、その後、田無から飯能に移ったことも知り、飯能まで平九郎を探しに来たが、官軍の飯能総攻撃で飯能の町は炎上。必死に平九郎を探すが、どこにも平九郎の姿はなかった。ゆう**「恋慕のアリア」**を歌う。

■第3幕■

＜1場＞5月23日、昼過ぎ。顔振峠の茶屋。

平九郎は夢中で逃走しているうちに仲間とはぐれてしまい、助左と二人きりになってしまった。ひと休みしようと峠の茶屋で足を止めた。茶屋の女主人に、深谷に向かう道をたずねたところ、落ち武者と見抜かれ、そちらには官軍が大勢来ているので行かない方が良いと忠告される。また武士と見破られてしまうので、変装して刀を置いていきなさいと進言され、大刀を手渡し、身なりを変えて助左とともに峠を下りていった。

しばらくして、ゆうが峠の茶屋にやってくる。渋沢平九郎というお侍さまが来なかったかたずねるが、女主人は名前まではわからないと答える。ゆうは、女主人のそばにあった着物の紋所を見て、平九郎の着物であり、ここに立ち寄ったことを確信し、平九郎を追って峠を下りてゆく。

＜2場＞5月23日夕方。黒山。

途中で一緒になった飯能の百姓女、傷ついた女児とともに峠を下りて黒山に到着。女児は介抱の甲斐なく息を引き取る。平九郎**「嘆きの歌」**を歌う。ゆう、やっと黒山にたどりつき平九郎を見つけるが、官軍（神機隊）に阻まれ、ゆうの声は平九郎に届かない。平九郎はたった一人で神機隊5名に応戦するも被弾し、自らの死を悟る。平九郎**「永訣の歌」**を歌う。傍らの石の上に腰を下ろし、平九郎は自刃する。合唱**「渋沢平九郎」**を歌う。（完）

【公演】

2020 年 5 月 23 日（土）

深谷市民文化会館 大ホール

【制作】

脚本	：酒井 清	
作曲	：西下 航平	
演出	：磯野 隆一	
オーケストラ	：ぴとれ座（指揮：池田 開渡）	
合唱	：深谷で渋沢平九郎をうたう会（公募合唱団）	
衣装協力	：株式会社 武器屋	
実行委員会	：実行委員長	野口 享治
	：副実行委員長	仁平 秋弘
	：広報	斉藤 孝一
	：渉外	杉山 高一
	：会計	小山 充子
	：事務局	齊藤 則昭

【プロフィール】

■脚本：酒井 清（さかい きよし）

1951 年埼玉県狭山市生まれ。

武蔵野音楽大学声楽科卒業、同大学院音楽研究科修了。オーストリア国立ウイーン音楽大学に留学。

元日本合唱協会団員。声楽家、指揮者、詩人。詩集「浮く」を出版。

■作曲：西下 航平（にししした こうへい）

1992 年宮城県仙台市生まれ、石川県白山市育ち。

東京音楽大学作曲指揮専攻作曲「芸術音楽コース」を首席で卒業後、東京音楽大学大学院音楽研究科作曲指揮専攻作曲研究領域修士課程を修了。2012 年度、および 2013 年度東京音楽大学特待生に、また 2016 年度東京音楽大学大学院特待生にそれぞれ選ばれる。これまで作曲を池辺晋一郎、西村朗、原田敬子、鈴木敬、ピアノを山口泉恵、菅井千春、ヴィオラを升谷直嗣、声楽を水野賢司、中村昭一、指揮を野口芳久、薩摩琵琶を田中之雄、ジャズアドリブ奏法(ピアノ)をリック・オーヴァトンの各氏に師事。現在は作曲活動、ピアニスト、オーケストラ・ブラスバンド・合唱の指揮など多方面で活動している新進気鋭の若手作曲家。

■演出：磯野 隆一（いその たかかず）

1963 年埼玉県生まれ。1986 年埼玉大学教養学部卒業。同年埼玉県庁入庁。

2005 年米国公認会計士試験合格。 AICPA（米国公認会計士協会）会員。 JUSCPA（日本における米国公認会計士の団体）会員、同管理会計専門部会長。「一番やさしい自治体決算の本」「一番図解 よくわかる自治体決算のしくみやさしい自治体決算の本」等を出版。

小学 4 年生の時に合唱と出会い、以来この世界の住人となる。大学時代に増田順平氏の薫陶を受け、卒業後は田中信昭氏に私淑。複数団体の指揮者をつとめる。

■オーケストラ：ぴとれ座（ぴとれざ）

2016 年秋、池田開渡と彼の呼びかけにより集まった新進気鋭の若手演奏家で結成。「オーケストラはいかに楽しく、身近な存在になれるのか。その可能性を聴衆の皆様と共に探求し、最高のオーケストラエンターテイメントを作っていきたい。」をキーワードに、クラシックファンの裾野を広げるべく工夫を凝らしたステージ作りを心がけている。

2017 年 3 月の第 1 回音楽会を皮切りに、これまでに 5 回の自主公演を開催。また、依頼による公演も行い、足立区西新井文化ホール(ギャラクシティ)の主催演奏会にも出演。2017 年、2018 年 12 月には伊豆新世紀合唱団とも共演。

■指揮：池田 開渡（いけだ かいと）

1992 年、北九州市出身。2 才よりヴァイオリンを始める。東京音楽大学付属高校を経て同大学卒業。第 57 回、61 回全日本学生音楽コンクール全国大会入選。第 5 回大阪国際音楽コンクールエスポワール賞。第 45 回北九州芸術祭クラシックコンサート、グランプリ 福岡県知事賞受賞。2009 年～2014 年、バイエルン州立青少年オーケストラ（ドイツ）にヴィオラ首席として招聘され冬季演奏旅行に参加。これまでに九州交響楽団、湧き上がる音楽祭祝祭管弦楽団などと共演。ヴァイオリンを景山誠治、木野雅之両氏に師事。2012 年～2014 年東京音楽大学芸祭フィル指揮者。2012 年、2015 年に未風化のオーケストラにて、日本を代表する作曲家、糀場富美子氏の作品を指揮。その他コンサートをはじめ、小学校での芸術鑑賞教室やレコーディングなどでオーケストラを指揮。指揮を佐藤宏充、時任康文両氏に師事。現在、シェルム弦楽四重奏団、ロリエ弦楽四重奏団、ピトレ弦楽奏団メンバー。演奏活動に留まらず、演奏会の企画運営、トイ楽器の製作など幅広く活動しており、東京スカイツリー展望シャトル内楽曲のプロデュース、演奏も手がけている。

■衣装協力：株式会社 武器屋（かぶしきがいしゃ ぶきや）

映像や舞台での衣裳、小道具と現場での軍事考証及び指導する会社。

幕末～西南戦争までの衣裳及び小道具の日本最大の所有会社。（業界にある衣裳と小道具の５０％以上）手がけた主な作品に、「時空警察～伊藤博文暗殺事件」「隠し剣、鬼の爪」「河合継之助」「明日への遺言」「私は貝になりたい」「あの時僕の命はトイレットペーパーより軽かった」「白虎隊」「半次郎」「王妃の館」「関ヶ原」「鳥羽伏見の戦い」「西南戦争」「最後のサムライ」などがある。

■実行委員

＜実行委員長：野口 享治（のぐち たかはる）＞

栃木県在住。京三電機株式会社　取締役。有限会社京三サービス　取締役社長。

＜副実行委員長：仁平 秋弘（にへい あきひろ）＞

東京都在住。企業勤務の傍ら作曲活動をしている日曜作曲家。

第 22 回朝日作曲賞で「ハウリングする思考～男声合唱とピアノのための～」が佳作。

2017 年度ハンナ作曲賞受賞『無伴奏男声合唱のための「求婚の広告」』

＜広報：斉藤 孝一（さいとう こういち）＞

埼玉県入間市在住。カシオ計算機に勤務する IT エンジニア。

＜渉外：杉山 高一（すぎやま たかいち）＞

埼玉県さいたま市在住。株式会社声の教育社（スーパー過去問の出版社）勤務。

テレビ埼玉で過去問解説番組等にも出演。

＜会計：小山 充子（こやま あつこ）＞

埼玉県三芳町在住。ユニスト株式会社　常務取締役。

＜事務局：齊藤 則昭（さいとう のりあき）＞

埼玉県狭山市在住。ユニスト株式会社　代表取締役。